消えた炭鉱マンの夢

平和協定が招いた悲劇

退職金などスローダウン

―Ｍ生―

炭鉱の退職金の低さには、いまさらながら驚かされ、はげしい憤りを覚える。三井関連産業や市役所、教職員などの退職金に比べると、同一勤続年で五百万円～三百万円も低い状態です。

炭鉱マンの生涯をかけた夢であるマイホーム計画も、たとえ家を建てたとしても無一文になったり借金となっては、老後の生活に赤信号がでる。

安心して生活できる老後。マイホーム実現可能な退職金。

先輩たちはこの悲願をこめて、これまで血のにじむ闘いを繰り返してきたのです。しかし、昭和三十五年以降、労働者としてもっとも汚い裏切り行為（労働組合を分裂し、三池新労組を結成）によって、会社との闘いを放棄してスト権売り渡し、平和協定が出現してから今日まで、三池の労働者の右の悲願は完全にスローダウン。何もかも他産業との間に格差が生まれ、それがますます広がるばかりであります。

人ごとでない、この三池炭鉱でまかり通っているこの悲劇。すべての原因が平和協定にあることは誰の目にも明らかである。

しかしその悲劇の道をまたしてもこれから二年間歩み続けることを、新労組の幹部諸君はわずかな金と引っ換えに選んだのです。

争おう、誰に遠慮することもない、自分の問題ではないですか。家族や子供たちのためではないですか。

×

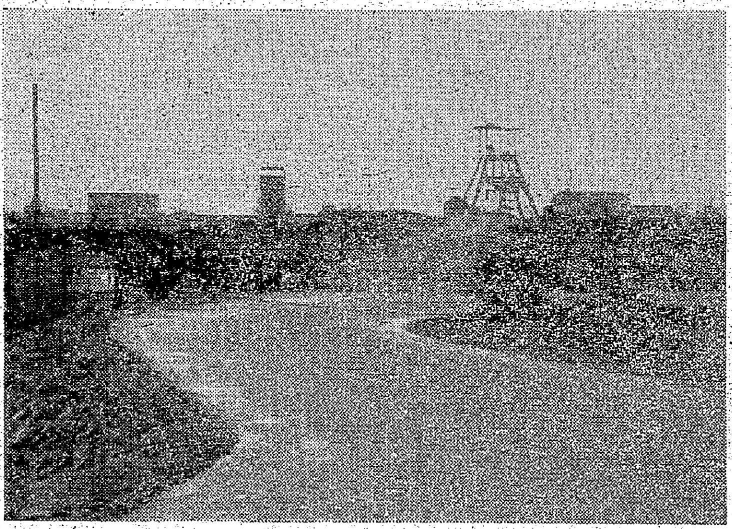
右は四山指導部第五分会新聞〝きずな〟（十月二十五日発行）に掲載されたもの。この直後に、秋季闘争のなかで炭労が闘った退職金増額闘争が、資本側の回答（一面、二面記事参照のこと）で妥結した。三池炭鉱労働者の悲願からは、なお遠い額でしかないことを示しており、闘いを今後に残すことになったが……。

毎日急がしい仕事に追いまくられ、労働者はくたくたに疲れて昇坑する。

坑底からの報告――

メチャクチャな現場保安

三井鉱山はあの三池大爆発という災害以来、重大災害をくり返していながら、いまも三川鉱では警戒網もはらずにダイナマイトをうったり、四山鉱では折角の待避訓練をわけもわからぬまま解散したりという、保安実態をさらけだしており、「これではメチャクチャだ。命が幾つあっても足りない」と、働く坑内労働者を不安がらせている。


こんど合併した有明炭鉱の建設中の竪坑をのぞむ。会社は祝盃をあげたというが………。

警戒網はらずマイト

坑道に突っ立った釘

三川鉱から

これは三川鉱の坑底から寄せられた〝保安メモ〟である。

×

十月八日　乙方開発（二番方）の午後八時四十分頃、西六十卸東九片捲立で炭函操作中ワイヤーが切れ、炭函が二十メートル逸走。ベルトコンベヤーを越える。

十月十四日　上層六十東一片払でのこと、二人の某係員は警戒網もはらずにダイナマイトをうつ。先日も四十五セット付近で同じことが行なわれていたというが、これでは命が幾つあっても足りない。

十月十五日、下部五十の三卸払は、「今日から掘る予定」と先程会社は説明していたが、その後何の音沙汰もない。十二月からと延期になったらしい。現場にはすでに荷がきていて、五十メートルの払に切換え坑道をつくっているとか。

上層六十卸は岩盤がでて、穴くりやら、短い動枠の鉄柱に切り換えるやらおうわらわ。仕繰工が採炭工見たいな仕事に使われている。

この日退避練訓。主席係員が「これで訓練を終ります」というと、機械の一係員大声で「まだきていません」。

実際のことだったら死んでしまうようなやり方だが、鉱長室への報告はどうなっているのか。でたらめもいいところ。

十月十八日　上層六十一卸でカラ穴くり。けい肺三度症の仲間もそばで働いているというのに。

同じ日、坑内で通気の主席係員に話す。最近風門の解体のとき、板類に使われている釘が打ち曲げられず、（もともとその場合必ず打ち曲げておかなければならないようになっている）真っすぐに突き立っていて危くてしょうがない。改善されなければ保安部にもっていく、と言明する。

十月十九日　上層六十の採炭係員が、「三池労組員とはいっしょに昇坑するな。新労組員はベルトコンベヤーの階段のところで待て」といったとか。ねらいは残業をさせたいところかららしいが、新労組員はかんかん。「組合にもちこんでやる」と鼻息荒し。

十月二十日　風呂の水の汚れがひどい。湯水を汲んで、ひとつ市の衛生課にもちこみ検査してもらうとするか。

十月二十一日　休憩所の消毒。ネズミ、ノミ、ゴキブリが、キンタマまでかじりやがるのにたまりかね、係員にねじこんで実現。係員と主席係員に幾つかの問題点を指摘、善処方を確認させたのに、現場係員ときたら知らぬ顔の半ベエ。

×

この項三川指導部・月野良信。

わからぬままに解散

おそまつな〝退避訓練〟

四山鉱から

三川大爆発以来十四年目を迎えとくに炭労の要求の中で闘い取られた退避訓練は、毎年三カ月に一回行なわれている。この程四山鉱においては、今年第四回目の訓練が十月十八日行なわれた。想定＝炭じん爆発。発令、午前十時十分。

開発関係では七十五キロワットホーリング捲立が集合場所であったが、まだ人員集約が終っていないにもかかわらず、田島主席係員はそのことを前置きしながら(1)炭じん爆発の被害の甚大さ。(2)爆発後の処置（風門開放による通気のたん落）。(3)退避ルートの説明。(4)COマスクの携帯――等の説明報告を行ない、その十分後に解散が行なわれた。だがその結果は、実におそまつなものであった。

とくに四山鉱は、六十卸の払展開を終り、三十五添卸に払および掘進切羽を展開中で、開発関係だけでも常一番では仕繰、機械、電気、通気、試錐、機械、三交代では掘進、材料運搬、機械当番、その他など①ぼう大な人員に対する連絡、および集約は大変なものとなっている。②集合場所が実函・空函線でふさがれたホーリング捲立のためせまくるしく、全長四十メートル程にも伸びた人の波で、肉声での説明さえきこえない――、という条件のもとで、今回はその説明中に、保安器材としてでなく生産の武器となってしまっている携帯無線機の、「早くベルトを運転してくれ」という声（退避訓練に集合していない人がいた証拠）といっしょになってしまって、何もわからぬまま解散してしまうという実態となっている。

このおそまつな訓練に対して、たまらなくなった三池労組員より抗議の意見がだされたにもかかわらず、その返答は「上司と相談する」ということになってしまった。こういう事態を考慮して、一週間前の保安会ではきめこまかい分散集約報告もあり、防爆マイク使用などの意見もだされているにもかかわらず、それを無視した結果がこのおそまつな退避訓練だったのである。

一一・九も近いというのに、会社・職制の保安態度はこんな状態である。怒りを覚えずにはいられない。

×

この項四山指導部・野田忠義。

労働者が目ざわりか

四山鉱　社長様の入坑に

▼…十月二十九日、四山鉱に有吉社長が入坑した。

そこで、昔の殿様行列時に、農民が道ばたに土下座をさせられた以上のできごとがありました。

払部内では休憩中「社長がきて目ざわりになるけん、倉庫の中に入っとかんの」と、竹ス囲いの倉庫の中に入れられた。

それに対して仲間の間から、「社長から感謝さるべきなのに、何と思っているのか」と怒りの声。

常一番では、主席係員をはじめ数名を早出させ、清掃させたり、職制を各所に配置したり。

社長様々を迎えるためにはこんな取り組みに引きかえ、片方では労働者を物としか考えない会社。

▼…その日は新労組の平和協定をどうするか、を集約する委員会が開催される日。「社長はそれが気になって、東京からわざわざきたのだろう」との声もでている。

×

四山指導部三分会新聞〝三本線〟（十月三日発行）の痛快きわまる記事。

賃金展開で賃上げがダウン

給料袋の中に、賃金明細書が入っていた。

賃上げ分よりマイナスだ。憤りをおぼえるのは私一人ではあるまい。

いまでさえ低賃金の坑外なのに、満足に昇給もなくカットするとは何事だ。

なぜ、坑外賃金を基準にした展開ができないものか。

×

三川鉱の坑外労働者からあがっている憤マンです。（新聞〝はぐるま〟から）いかがですか。